

上顎中切歯に生じた縦破折に対して治療を行った 1 例

○平野慶子, 柳田可奈子*, 仲野道代
(岡大・医歯薬・小児歯, *柳田矯正歯科かなこ小児歯科クリニック)

【目的】

幼若永久歯の外傷のうち歯冠から歯根に及ぶ縦破折の保存治療は困難であり、抜歯に至るケースが多い。また治療を行った場合についての予後は不明である。今回、幼若永久歯の歯冠歯根破折の治療後、6年間経過観察を行った症例について報告する。

【症例】

患児：初診時年齢 9 歳 4 か月、男児。

主訴：歯根破折の治療。

既往歴：メイアクト服用で発疹あり。家族歴：特記すべき事項なし。

現病歴：登校中に上顎前歯をコンクリートに強打し、近医を受診した。右側上顎中切歯の歯冠歯根破折が認められ抜歯となる可能性を指摘されたため、歯の保存を希望して当科来院。

【処置および経過】

右側上顎中切歯は近医にて切端破折部位にコンポジットレジン (CR) 充填が行われており、唇側の歯頸部から歯根部に至る破折部位は接着性セメントにより封鎖されていた。打診痛や歯肉の腫脹はなく、動揺は 1 度であった。受傷 12 日後では特に変化は認められなかった。受傷 1 か月後に接着性セメントが脱離したため破折部位を再度封鎖し、歯冠部はフラサコクラウンによる修復を行った。さらに受傷 2 年後に強く咬合した際に破折部位が離開して新たに口蓋側に通じる破折が生じたため再度 CR 充填を行った。受傷 5 年 7 か月後でガッタパーチャによる根充を行った。受傷 6 年 7 か月後に顕著な変色を認め、審美性の回復のため唇側面の切削による CR 充填を行った。

【考察】

今回の歯冠歯根破折では歯の保存に努めて治療を行ったが、今後も歯根破折部位については経過観察が必要であり、将来の補綴治療の説明が必要と考えた。

岡山大学病院における小児歯科受診患者の動向

○松三友紀, 角田陽子, 平野慶子, 仲野道代
(岡大・医歯薬・小児歯)

【緒言】小児期の齲蝕予防を中心とした歯科保健対策により、乳歯齲蝕の減少と軽症化の傾向が進んでいる。その一方で、岡山大学病院小児歯科には重症齲蝕、発達遅滞あるいは全身疾患を有する患児が数多く来院している。岡山大学病院では 2012 年に小児医療センターが設立され、一方で 2016 年には特定機能病院として歯科における選定療養費が義務化された。これらのことより、当院では紹介率が増加し、患児の罹患状況は重症化の傾向があると考えられる。

【対象と方法】2011～2017 年までの 7 年間に岡山大学病院小児歯科を受診した初診患者数、紹介患者数、医科からの紹介患者数および、医科の内訳を調査した。また、比較として小児医療センターや選定療養費に影響されていない 2006 年の初診患者について調査した。

【結果】2011～2017 年の初診患者数は 367～457 人、2006 年は 418 人と大きな変化はなかった。そのうち紹介患者の数は近年では 247～289 人 (61～70%) であり、2006 年の 152 人 (36%) と比較して増加していた。また、医科からの紹介は、小児医療センターの 2015～2017 年の 3 年間では 80～98 人 (32～38%) と高い割合を占めた。小児科からの紹介が最も多く、次いで心臓血管外科であり、呼吸器外科や肝胆膵外科からの紹介も増加していた。

【考察】医科からの紹介患者数が 2015 年以降増加しているが、これは 2012 年に設立された小児医療センターや 2016 年の選定療養費の義務化の影響が大きいと考えられる。今後は、高次医療機関として地域医療との連携が重要になってくると考えている。

造血幹細胞移植施行患者における口腔レンサ球菌の分布

○森川優子, 吉田衣里, 角田陽子, 高島由紀子, 平野慶子, 仲 周平, 稲葉裕明, 仲野道代
(岡大・医歯薬・小児歯)

【諸言】

造血幹細胞移植を施行される患者においては、前処置により一時的に白血球数が極端に減少し感染が起こりやすい状態になるため大量の抗生物質の投与が行われる。それに伴い免疫能も低下することから、口腔内環境の変化が起こっている可能性が示唆される。本研究で大量化学療法による患者の口腔内細菌叢の変化を口腔レンサ球菌の分布を調べることにより検討したのでこれを報告する。

【対象と方法】

本研究は、岡山大学生命倫理審査委員会の承認を受け行った。保護者の同意が得られた 11 名の患児 (6.4 歳～17.0 歳: 中央値 12.3 歳) の口腔内診査を行い、移植 1 か月前、1 か月後および 3 か月後の唾液を採取した。採取した唾液より通法を用いて染色体 DNA を抽出し、それらをテンプレートとし、6 種類の口腔レンサ球菌の存在を Polymerase-Chain Reaction (PCR) 法を用いて行った。

【結果】

移植 1 か月前のサンプルにおいて最も検出率が高かったのは *Streptococcus sanguinis* および *Streptococcus oralis* であり、最も低かったのは *Streptococcus mutans*、*Streptococcus sobrinus* であった。移植 1 か月後のサンプルではすべての口腔レンサ球菌の検出率は低下し、主要な齲蝕原性細菌である *Streptococcus mutans* は検出されなかった。移植 3 か月後のサンプルでは、すべての口腔レンサ球菌は 1 か月後と比較して検出率が増加した。

【考察】

移植 1 か月後には口腔レンサ球菌の検出率が減少し移植後 3 か月後では、移植前に比較して増加したことは、抗生物質の大量投与により口腔常在菌数が低下し、その後、新たな菌が定着し易い状況になると考えられる。そのため、移植後においても継続的な口腔管理が非常に重要である。

上顎前歯部において歯胚の形成障害を認めた 1 例

○吉田 翔, 平野慶子, 仲野道代
(岡大・医歯薬・小児歯)

【緒言】永久歯の萌出遅延は先行乳歯の根尖病巣、過剰歯、あるいは歯牙種といった石灰化物の存在、歯槽骨の緻密化、歯肉の肥厚、萌出余地不足および全身疾患などが主な原因となる。歯胚の形成障害もその一因であり、それらは外傷、感染性疾患および内分泌異常などにより引き起こされる。また、永久歯の萌出障害は上顎中切歯に最も高い頻度で発現することが知られている。今回我々は、両側中切歯の萌出遅延とそれらの歯胚の形成障害を認めた症例について報告する。

【現病歴】患児は初診時年齢 9 歳 4 か月の女兒であり、特記すべき既往歴はない。1 歳 3 か月頃に上顎左側乳中切歯および側切歯の未萌出のため近医を受診し、経過観察を受けていた。その後、これらの歯は 3 歳 11 か月頃に萌出し、8 歳 4 か月頃に脱落するも、後続永久歯が萌出しないため当科での精査を勧められ来院した。パノラマエックス線診査の結果、両側上顎中切歯の歯胚に形成障害を認め、さらに上顎左側側切歯および犬歯の先天欠如を認めた。両側上顎中切歯は萌出遅延と診断し、義歯を作製して機能性および審美性の回復、下顎前歯の挺出防止を図った。その後、現在までデンタルおよびパノラマエックス線から歯胚の形成状態を観察しているが、上顎両側中切歯の歯胚の形成は進んでいない。患児および保護者との相談の結果、今後は永久歯列完成まで義歯を装着して経過観察を継続し、成長期終了後に最終的な補綴治療方針を決定する予定である。

【考察】歯胚形成障害は機能性および審美性を損なう可能性が高く、特に上顎前歯では審美性に大きな影響を及ぼす。その治療には義歯作製のような補綴治療のほか、症例に応じて外科あるいは矯正などの他科との連携が選択肢に含まれる。患児と保護者の希望を考慮した上で、永久歯列完成後までの治療方針を事前に検討する必要があると考えられる。

スティックラー症候群患児に対して歯科的管理を行った1例

○浅海春華, 森本節代, 高島由紀子, 仲野道代
(岡大・医歯薬・小児歯)

【緒言】スティックラー症候群は、II型コラーゲン遺伝子の変異により結合組織に異常を認める遺伝性疾患であり、主要症候として顔面骨格の形態異常、特に口蓋裂や小顎症が認められることが多く、また感音性難聴、眼や関節の異常などを発症するケースもある。本症例では、5歳11か月で乳臼歯部に齲蝕が認められたため、当科を紹介来院された。今回我々は、当該患児に対して齲蝕治療および継続的な口腔衛生管理を行ったのでこれを報告する。

【症例】患児：初診時、5歳11か月の男児 主訴：歯列、咬合の精査希望
現病歴：2歳3か月時、低身長を含む総合的な精査を希望し当院小児科を受診し、スティックラー症候群と診断され治療を受けていた。2歳5か月時に当院口腔外科を紹介され、3か月に1度、口蓋裂の経過観察および言語訓練を受けていた。その後、5歳11か月時に、小児科より歯列および咬合に関する精査目的で当科を紹介され、受診した。

歯科的既往歴：1歳6か月時、地域病院にて硬軟口蓋裂手術および舌小帯伸長術を受けた。言語訓練は、近医耳鼻科にて1か月に1度受けていた。

【処置】初診時に上顎両側第一乳臼歯の遠心および、第二乳臼歯の近心に象牙質齲蝕が認められたため、レジン修復治療を行った。同時に、口腔内清掃、ブラッシング指導及び食事指導を行った。上下顎歯列弓の狭窄及び叢生のため、上下顎第一大臼歯の萌出後(8歳2か月時)、当院矯正科へ紹介を行った。その後、当科にて上下顎両側乳犬歯晩期残存のため抜歯を行い、現在は引き続き口腔衛生管理を行っている。

【考察】本症例では、スティックラー症候群に特徴的に見られる口蓋裂および小下顎症が認められた。現在のところ、口腔清掃状態は改善されているが、矯正器具の装着等による清掃困難や、今後、永久歯の萌出時期を迎えることを考慮すると、継続的な口腔衛生管理指導が必要であると考えられる。

急速な骨吸収により乳歯の早期脱落を来した小児の1例

○田畑佳子, 吉田衣里, 仲 周平, 稲葉裕明, 仲野道代
(岡大・医歯薬・小児歯)

【緒言】乳歯の早期脱落は、外傷や根尖性歯周炎が原因の場合や、周期性好中球減少症や低フォスファターゼ症などの全身疾患を有する場合に認められる。今回我々は、外傷の既往がなく全身疾患を有さない5歳7か月の男児において、下顎乳歯に著しい動揺および歯槽骨の垂直性骨吸収が認められ、乳歯が早期に脱落した症例に遭遇したので報告する。

【症例】患児：5歳7か月の男児 主訴：自然脱落した左側下顎乳前歯に関する精査希望
現病歴：5歳1か月時より下顎左側乳前歯部の動揺を認めため近医を受診。咬合干渉と診断され、咬合調整が行われ経過観察となった。その後、5歳2か月時に発熱に伴い、乳中切歯、乳側切歯および乳犬歯が自然脱落したため、当科での精査を勧められ受診。 既往歴：特記事項なし。

現症：下顎右側乳中切歯、乳側切歯、乳犬歯および下顎左側第一乳臼歯に動揺が認められ、歯肉溝の深さは最も深い部位で下顎右側乳中切歯が6mmで、その他は3mm以下であった。デンタルエックス線診査では、下顎右側乳中切歯に著明な垂直性骨吸収を認めた。本症例の報告にあたり、患児の保護者より文書にて同意を得ている。

【処置および経過】初診時よりスケーリングおよび歯肉溝の洗浄、塩酸ミノサイクリンの投与を継続的に行った。また全身疾患の精査のため当院小児科を受診。血液検査の結果、CRPの上昇はあるものの、その他の異常は認めなかった。歯肉縁下プラークの細菌培養検査では *Eikenella corrodens* の検出頻度が高かった。下顎乳歯の動揺は一時的に軽減したが、5歳11か月時に再び下顎右側乳犬歯に著しい動揺を認めたため、抜歯を行い下顎義歯装着となった。

【考察】今回、*E. corrodens* が検出されたことから局所的な菌の感染による歯周炎が疑われる。今後、永久歯への交換時期に向けて、永久歯列での歯周炎の発症を防ぐために、引き続き口腔衛生管理を行う予定である。